

I K U S E I

ウキセイ

2009 47



社団法人 **競走馬育成協会**

CONTENTS

■巻頭言

○ダービー後、育成の現場で思うこと

朝井 洋(日本中央競馬会 日高育成牧場 場長) ①

■特 集

○人材不足に関する取り組み ②

○基礎調査結果について ⑤

アンケート調査結果

競走馬資源有効活用事業結果

■行 事

○平成21年度通常総会開催 ⑪

○平成21年度育成等に関する懇談会 ⑪

■事 業

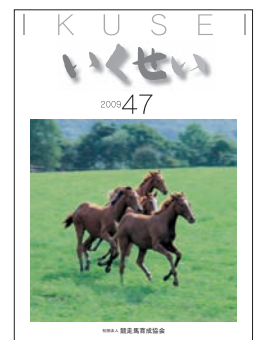
○育成技術表彰事業について ⑭

○競馬関連機材等有効活用事業 ⑯

■お知らせ

○50周年記念事業 ⑯

○ホームページ告知



題字 会長 小沢一郎
表紙写真 内藤律子

ダービー後、育成の現場 で思うこと



日本中央競馬会 日高育成牧場長
朝井 洋

「4年連続で日高産馬からダービー馬が出現するかも？」の期待は残念ながら叶わなかったが、久々に関東馬がダービーを制覇した。ロジユニヴァースは皐月賞での雪辱を大舞台で見事に果たしたが、背景にある関係者の努力に敬意を表するとともに、これを機に関東馬のさらなる活躍を期待したい。

今年のダービーは、JRA 育成馬であったセイウンワンダーが出走したこともあって、生産者の筒井氏とともに特別の思いを持って東京競馬場で観戦した。育成牧場長としては場長冥利につきる日であったといっても過言ではない。説明のしようがない高揚と期待であつという間に終わる競馬界頂点のレースを瞬きもせず見守り、我に帰ってから無事にレースを終えたことを感謝するとともに、素直に勝ち馬を賞賛できる一連の独特な気分を味わえた。これも競馬の持つ魅力のひとつなのか、という思いであった。似たような思いをファンも含め、多くの関係者が抱いたであろう。

レース中こそ小降りになったとは言え、装鞍所からパドック、馬場入りに至るまでこれまで経験したことのないような大雨の中、闘争力と集中力を維持し続け荒れた馬場のレースを制することは並大抵のことではない。こうしたレースを制する馬の精神力を養う育成や管理方法があるとするなら、それに強い興味を持つ。

一般に、体力は行動体力と防衛体力に分類される。前者は、筋力や持久力、神経や関節の機能であり素質やトレーニングによって決定されるが、後者は、環境や病原菌、疲労、苦痛、恐怖などのストレスに対する抵抗力、適応力を意味し、これらは経験や生活様式によって決定されるという。馬なら、馴致や管理方法に影響されると考えてよい。しかし、防衛体力を増進させる特殊な管理方法があるのではなく、日々の健康管理と適切な栄養補給に加え、運動などによる適度なストレスが必要であるが、オーバーワークによる極度の疲労は免疫力を低下させる。したがって、速やかな疲

労回復も体力増強に重要となる。いずれにせよ、両方の体力が備わっていないと、今年のダービーのような過酷なレースは制覇できないのであろう。生産から育成初期～後期までを一貫して行える大手牧場の強みのひとつはここにあると思われる。

一方、人に従順な馬は無駄なエネルギーを消費することなく、コンディションが良ければどのような環境下においても競走に集中することができるだろう。馬の気性に合わせた取扱いや馴致方法が競走馬のパフォーマンスに与える影響は想像以上に大きい可能性があるのではないだろうか。

馬と人との関係づくりは出生直後から始めることが効果的であることに間違いはない。さらに、育成場に移ってから、さまざまな工夫が必要となるかもしれない。たとえば、日々の調教後に馬をリラックスさせてやること、ストレス軽減のための管理方法を取り入れることなども効果があるのではないだろうか。限られた時間内に多頭数の調教をこなさなければならない中で困難も伴うかもしれないが、各育成場で知恵を絞る価値はあると思う。また、そうした取り組みは育成場間の差別化や特色を生み出し、ひいては預託馬のオーナーの信頼に結びつくはずである。今後は生産頭数が減少するなか、育成場間の競争はさらに激しくなると予測される。実績は言うに及ばずであるが、各育成場の調教や管理方法に独自の創意工夫をこらし、特色ある育成方針を大いにアピールしてほしいと思う。いわゆる、「ハードからソフトへ」は育成界にとっても重要なキーワードとなるのではないか。そうした差別化は育成業界を一層活性化させ、人材不足にも光明をあてるかもしれない。

わたしたち日高育成牧場で取り組んでいる育成業務は、さまざまなステージにおける「強い馬づくり」のための技術開発とその普及を目的としているが、こうした個々の育成場のトータルなレベルアップに関しても関連団体と連携しながら支援していきたいと考えている。

人材不足に対する取り組み

—競走馬の生産育成牧場への若手就業者促進プラン—

平成19年度から、当協会理事会で、「競馬産業に参入する若者の不足」について議論がなされ、「育成等に関する懇談会」で業界一体となって取り組むようJRAに要望し、平成20年度からJRAとともに実態調査を進め、その調査結果をもとに、「競走馬の生産育成牧場への若手就業者参入促進プラン」を作成しましたので下記のとおり紹介いたします。

牧場若手就業者促進事務局

(社)競走馬育成協会・(財)軽種馬育成調教センター・
(社)日本軽種馬協会・(社)日本競走馬協会・JRA 日本中央競馬会

1. 生産育成牧場の現状

～なぜ人手不足なのか

① 概況

2008年サラ系の年間生産頭数は7,361頭、生産牧場数1,120戸と1992年をピークに減少を続けている。一方、2000年以降、日本馬は海外GI競走で10勝を超える優勝を遂げ、2006年にはディープインパクトが凱旋門賞で一番人気に支持されるなど、内国産馬の資質や国際的な評価は飛躍的に高まっている。

また、近年サラブレッドの生産育成は、出産～離乳までの初期育成、離乳～1歳秋の馴致の中期育成、騎乗馴致～トレセン入きゅうまでの後期育成など、馬の成長に応じた分業化や専門化が進み、生産、育成、セリ上場への馴致（コンサイニング）をそれぞれ専門とする専門牧場や、生産から現役馬の休養調整まで一貫して行う大規模牧場など、専門化、大規模化が進むなど牧場の経営形態はここ数

年で大きく変化し高度化している。

② 牧場における人手不足

全国の牧場で働く従業員のうち、特に騎乗者が不足するようになった。これは、少子化、競馬人気の低迷、高校卒業者の大手企業による囲い込み等から、2005年頃より牧場への新規就業者、若手騎乗者の参入が減少しはじめ、同時に牧場からの従業員の離職も増加するなど牧場の人手不足は顕著になってきた。

また、次世代の牧場の担い手を養成するJBBA生産育成技術者研修（年間定員12名）や、BTC育成調教技術者研修（年間定員20名程度）は、主に北海道の牧場にフレッシュなマンパワーを供給し、馬産地の人手不足解消へ一定の役割を果たしているが、2002年頃から両研修への応募者は激減し、一昨年はどちらも定員数ギリギリの応募者しか集まらないなど、若者の牧場就業意欲の低下は顕著である。

更に、牧場に就職しても、厳しさに耐えられず、我慢が利かず一つの職場に定着できない若者気質も人手不足に拍車をかけている。

③ 牧場における人手不足調査

2005年頃から、JBBAおよびBTC研修生の応募者減のみならず、北海道を中心とした大規模牧場や育成専門牧場からも人手不足を訴える声が高まってきた。そこでJRAと(社)競走馬育成協会は、昨年3月から8ヶ月間をかけ、牧場における人手不足の実態を把握するため、北海道・栗東トレセン周辺の牧場、JRA競馬学校、ハローワークなどでの現地ヒアリングや192牧場に対しアンケート（回答130牧場）を行うなど共同調査を行ってきた。

調査結果によると、半数の牧場が現状の人手不足に悩み、ほとんどの牧場が将来の人材確保に不安を抱えていることが明らかとなった。

2. 牧場への若手就業者参入のために

① 雇用の現状

本年5月政府発表の雇用動向によると、世界同時経済不況の影響で有効求人倍率は0.44倍と調査開始1963年以降で最悪の数値、完全失業率は5.2%、また完全失業者数は前年同月より77万人増の347万人となった。完全失業率は1月より上昇を続けており、特に15～24歳の若年層の雇用不安は社会問題となっている。大手自動車・電機メーカーのみならず全ての分野において新規採用数が減り、高校・大学卒業者の内定取消も問題化している。

一方、農林水産業・福祉介護・飲食など一部のサービス業においては、若年層を中心に人手不足が解消されておらず、不人気業種の需給アンバランスやミスマッチが根深い問題となっている。馬産地ハローワーク浦河によると、本年4月の農業（軽種馬産業）の有効倍率は2.57倍と日高平均の0.57倍を大きく上回っており、特に24歳以下の有効求職者が少なく、未曾有の就職難という情勢下でも牧場の人手不足、就職先としての牧場の不人気ぶりは一向に解消されていない。

② 雇用確保の好機

前述のとおり、軽種馬産業における人手不足と将来の担い手の確保に関して、多くの牧場が不安を抱え、JBBA およびBTC など技術者養成研修への新規参入者も増加には転じていない。

一方、国内の雇用情勢は、未曾有の経済不況により、雇う側の「超買い手市場」であり、農林水産業や福祉介護や軽種馬産業など若者にとってこれまで不人気業種であった産業にとっては、今は人材を確保する最大のチャン

スといえる。

しかし、現代の若者の職業意識は「失業中でさえ職を選別する」といわれており、安定志向の若者を馬産業に参入させるためのきっかけや仕掛け作りを行い、広くPRをすることで牧場就業へと導くこととしたい。

③ 牧場における求人の現状と対策

現在の牧場における求人方法は、各牧場の自前ホームページ、ハローワークや農業系求人サイト、競馬雑誌などによる求人や、牧場主個人とのつながりで大学・高校馬術部出身者などを確保するのが主である。

また、競馬学校きゅう務員課程卒業生の待機者を一時的に雇用しているケースもある。牧場では大手就職サイトの広告料金が割高（2週間で15～20万円）であること、牧場という業態の特殊性、騎乗者を中心に人材を必要としていること等から、積極的にサイトで募集している牧場は決して多いとはいえない。

一方、現代の若者はインターネットを活用して求職を行うのが主流となっており、高校や大学の新卒者や転職希望者は、就職情報サイトに履歴書を事前登録しサイトで企業情報をあらかじめ把握したうえで就職セミナー等で職を探すのが一般化している。

こうしたことから、まず抜本的な対策として、インターネットが若者の情報手段として日常化していることを踏まえ、募集方法をサイト主体に見直す必要がある。

一般的に、若手人材確保にかかるコストは一人あたり30万～100万円を要するといわれており、企業や牧場にとっても求人コストは大きな負担となっている。

そのため、このような経済不況下でも、新たに人材を求める産業や地域は、「業界単位」や「自治体単位」で特設サイトを開設し、業界・地域PRや合同就職フェアを実施して、スケールメリットを狙い、一企業あたりの求人コスト効率化を図るなど、業界や地域が一致協力して優秀な若手の確保と産業振興に向け努

力している。

④ 参加意向アンケートの結果について

本年6月、仮に産業全体で「牧場就職フェア」を開催した場合に、参加費（5万円）を払ってでも参加するかというアンケートを、(社)日本軽種馬協会、(社)日本競走馬協会、(社)競走馬育成協会すべての会員牧場に送付したところ、90 牧場から回答を得て 34 牧場 (37%) が参加の意思を示した。

また、「現状は人員が充足」で不参加と回答した牧場からも、軽種馬産業が一丸となつて行う「牧場就職フェア」開催趣旨に賛同する意見が多かった。

3. 新規就業者参入促進策の具体的な検討

① 3つ（プラス1）のコンセプト

『強い日本馬づくりは、まず優秀な人づくりから』という基本理念のもと、以下3つのコンセプトに従い若者たちに牧場就業への興味を喚起し、JBBA および BTC など研修機関への就学や、実際の牧場就業につなげていきたい。

I 馬産業へ若者が就業するためのきっかけづくり

II 職業能力開発機関（JBBA・BTC）へ参入促進

III 国内の生産牧場・育成牧場の人材確保の橋渡し

雇用主（牧場経営者）や教官へのフォロー活動（労務管理や従業員意識改革など人材開発セミナー）

② 具体的なプラン（検討中）

I 「牧場で働こう専門サイト」（案）

- ◆ 「牧場で働こうフェア」開催の告知
- ◆ 「軽種馬産業とは」（種付～出産～飼養管理～馴致調教～セリ～競走）
- ◆ 「牧場で働くまでの流れ」・・・「就業者の体験談や年間の仕事の流れ」
- ◆ 「キャリアプラン」・・・研修～牧場就業～海

外研修～スタッドマネージャー等

- ◆ 「求人牧場の紹介」・・・掲載希望牧場の紹介（各自HPへのリンク）
- ◆ 「研修について」・・・JBBA・BTCの研修制度や海外研修の紹介

II 「牧場で働こうフェア」概要プラン（案）

開催地：東京都内

時 期：学生夏休期間1～2日（セリ開催日を除く7月末頃か）

- ◆ 講 演（牧場経営者 大手・中堅）
- ◆ 体験談（牧場就業者 スタッドマネージャー等）
- ◆ 研修担当者（JBBA 又は BTC 研修担当者）
- ◆ 牧場と求職者とのコミュニケーション（各牧場によるリクルート活動）
- ◆ 研修相談コーナー（JBBA 及び BTC 研修生募集）
- ◆ 厩舎見学・乗馬体験（人数限定）・競馬博物館見学

フェア告知の1（一般に職を求める若者へ）

- ◎大学4年生 60万人
- ◎転職希望者 150万人 合計 220万人
- ◎高校3年生 10万人

農業・畜産系大学（専門学校）・北海道就業希望・Iターン・Uターン希望者・自然志向・農業志向・東京・中山競馬場近隣住所 etc から10万人を抽出してDMを発送する。予算次第ではポスターや公共交通機関での告知

フェア告知の2（競馬や乗馬関係の若者へ）

- 全日本乗馬倶楽部振興協会 乗馬クラブ約280会員へ通知
- 日本馬術連盟（全国大学馬術部約90校・全国高校馬術部50校へ通知）
- JRA・JBBA・BTCホームページ・ポスター他
- 競馬記者クラブ加盟社・民放記者クラブ加盟社・グリーンチャンネル他

基礎調査結果について

—アンケート調査結果—

この調査は、平成10年度より日本中央競馬会から委託を受け、育成環境の改善、育成技術の向上及び育成経営の強化に資することを目的として、育成経営全般にわたる調査として実施しています。調査結果により把握された育成業界の実態は、行政・JRA・関係団体の業務運営の参考になっております。

会員の皆様方からのご協力をいただきましたアンケート回答には、大変感謝しております。

最近の調査結果（平成20年）の抜粋をご報告いたします。

（調査対象牧場193牧場、回答牧場131牧場（回収率67.9%））

1. 経営主

経営主の年代は、30歳代12%、40歳代13%、50歳代37%、60歳以上38%となっています。

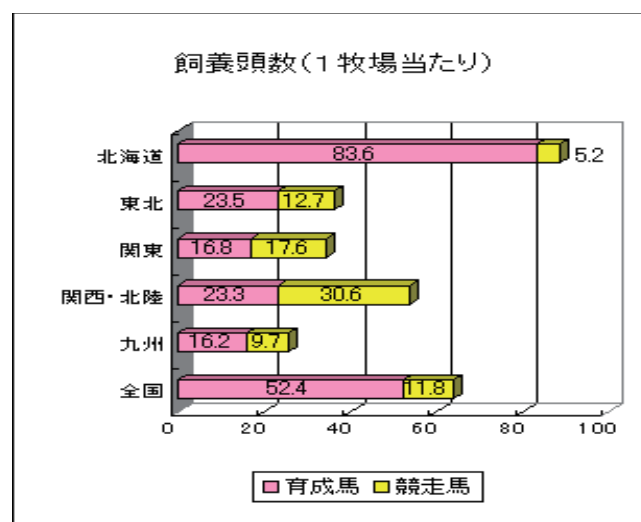
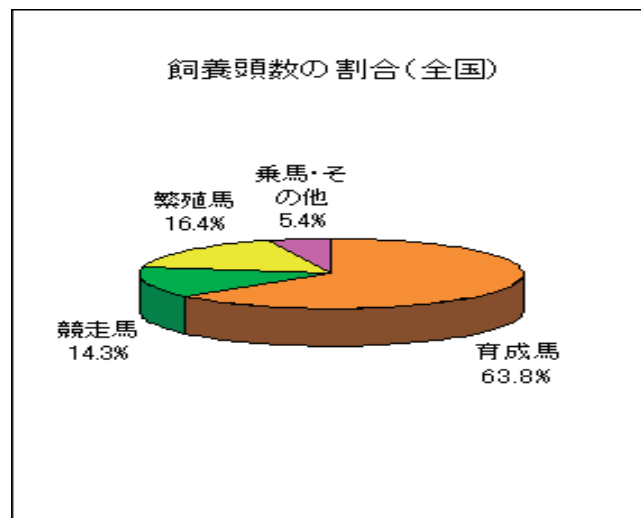
（回答牧場130牧場）

年代別	北海道	東北	関東	関西・北陸	九州	全国	%
20代	0	0	0	0	0	0	0.0%
30代	11	0	3	2	0	16	12.3%
40代	8	0	3	3	3	17	13.1%
50代	23	7	11	3	4	48	36.9%
60代～	24	5	8	8	4	49	37.7%
合計	66	12	25	16	11	130	100.0%

2. 飼養頭数

(1) 1牧場当たり育成馬52.4頭、競走馬11.8頭が飼養されています。

(2) 1牧場当たり地域別飼養頭数は、北海道地域：育成馬83.6頭、競走馬5.2頭、東北地域：育成馬23.5頭、競走馬12.7頭、関東地域：育成馬16.8頭、競走馬17.6頭、関西・北陸地域：育成馬23.3頭、競走馬30.6頭、九州地域：育成馬16.2頭、競走馬9.7頭でした。

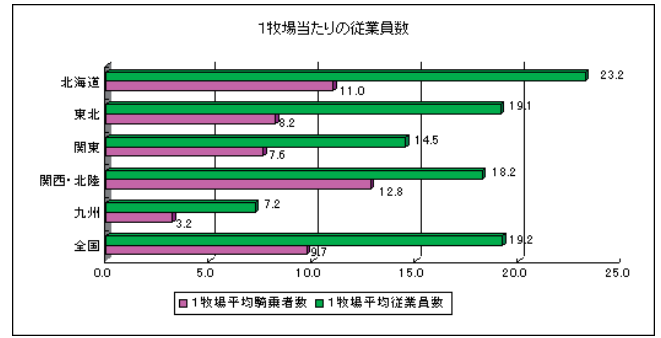
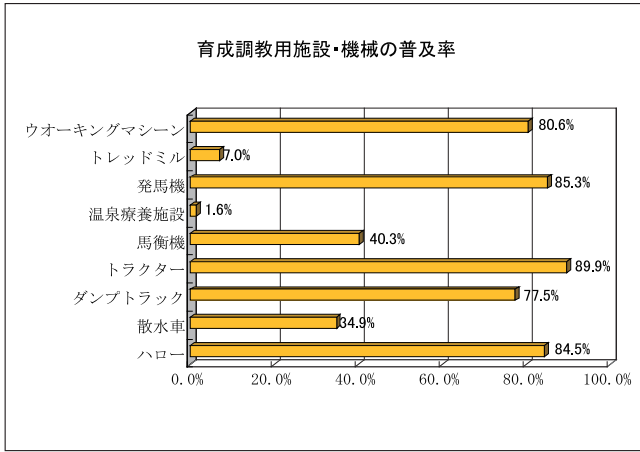


3. 育成調教用施設・機械の普及率

育成調教用施設・機械の普及率は、下表に示すとおりです。

（回答牧場：129牧場）

区分	ウグ オマ 1シ キ ン	ト レ ッド ド ミ ル	発 馬 機	温 泉 療 養 施 設	馬 衝 機	ト ラ ク タ ー	ダ ン ブ ト ラ ク	散 水 車	ハ ロ ー
普及 牧場数	104	9	110	2	52	116	100	45	109
普及数 (%)	80.6%	7.0%	85.3%	1.6%	40.3%	89.9%	77.5%	34.9%	84.5%
普及延 べ台数	311	9	144	2	136	310	254	58	168



4. 従業員

(1) 地域別従業員数

- ① 全国(126 牧場回答)の従業員数は1 牧場平均 19.2 人で、地域別には、北海道地域の牧場の 23.2 人が最も多くなっています。外国人雇用従業員は、全国で 67 人でした。
- ② 1 騎乗者の平均騎乗頭数は、5.5 頭でした。(6,680 頭 / 1,220 人 = (1 ~ 3 歳馬 + 競走馬) / 騎乗者)

区 分	全国	北海道	東北	関東	関西・北陸	九州
全体数	2,420	1,533	191	319	291	86
1 牧場平均従業員数	19.2	23.2	19.1	14.5	18.2	7.2
外国人従業員 計	67	46	1	9	2	9
事務員	191	109	19	31	23	9
調教管理者	180	92	22	36	20	10
うち 外国人	6	3		2		1
騎乗者	1,220	728	82	168	204	38
うち 外国人	56	40	1	6	2	7
1 牧場平均騎乗者数	9.7	11.0	8.2	7.6	12.8	3.2
厩務作業員	829	604	68	84	44	29
うち 外国人	5	3		1		1
回答牧場数	126	66	10	22	16	12

(2) 採用した騎乗者及びきゅう務作業者の経歴

- ① 1 牧場当たりの採用人数 (1 年間) は、採用したと回答した牧場では全国平均で 4.1 人でした。また、採用経歴では、「育成牧場等経験者」が最も多く延べ 91 名 (26.5%)、次が「馬術経験者」の延べ 77 名 (22.4%) でした。
- ② 「外国人」の採用は、延べ 30 名、そのなかで北海道地域が 21 名 (70.0%) を占めています。また、採用者の国籍は、フィリピンが 18 名、マレーシアが 6 名とアジア地域からの者が多くを占めています。
- ③ 「30 ~ 59 馬房規模」の牧場で延べ 70 名の採用があり、うち「育成牧場等経験者」が最も多い 22 名の採用でした。また、「90 馬房以上規模」の牧場では、「馬術経験者」50 名の採用でした。

採用した騎乗者及びきゅう務作業者の経歴 (馬房別) (平成 19 年 5 月 1 日 ~ 平成 20 年 4 月 30 日の 1 年間)

規模 (馬房別)	養成機関	育成牧場等経験者	馬術経験者	外国人	競馬場関係者	その他	合計	回答牧場数	1 牧場当たりの採用人数
1 ~ 29	1	6	3	3	2	3	18	9	2.0
30 ~ 59	4	22	12	9	14	9	70	29	2.1
60 ~ 89	9	16	12	5	6	9	57	22	2.6
90 ~	24	47	50	13	7	57	198	24	8.3
合計	38	91	77	30	29	78	343	84	4.1
%	11.1%	26.5%	22.4%	8.7%	8.5%	22.7%	100.0%		

外国人採用の内訳

(平成19年5月1日～平成20年4月30日の1年間)

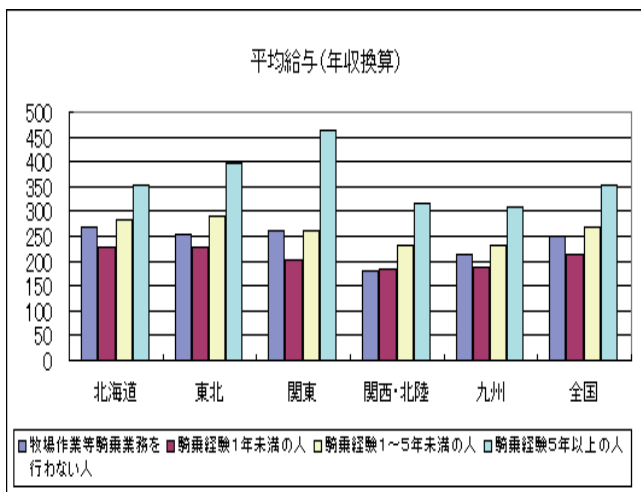
区 分		北海道	東北	関東	関西・北陸	九州	合 計	回 答 牧場数
E U 圏	アイルランド	2					2	1
オセアニア	ニュージーランド			1			1	1
	オーストラリア	1					1	1
	小計	1		1			2	2
アジア	フィリピン	12		1	1	4	18	11
	マレーシア	4		2			6	3
	小計	16		3	1	4	24	14
	ブラジル	2					2	1
合 計		21	0	4	1	4	30	18
%		70.0%		13.3%	3.3%	13.3%	100.0%	

(3) 給与

平均の年収は、「牧場作業等騎乗業務を行わない人」が250万円、「騎乗経験1年未満の人」が214万円、「騎乗経験1～5年未満の人」が268万円、「騎乗経験5年以上の人」が354万円でした。

(注)

年収換算は、月額×12＋ボーナス（月数×月額）で計算しました。牧場のなかにはボーナス欄が空欄（無記入）の牧場があり、この場合年収は低めに算出されます。このような事情等もあり、あくまでも参考としての数値です。また、牧場の多くは宿舎・食事提供等があるため、一般の給与水準とは単純比較ができません。



5. 騎乗者

(1) 騎乗者数の充足度

- ① 「充足」を感じる牧場は、全国平均で51.2%でした。
- ② 1牧場当たりの不足人数は、全国平均で1.1人（143人／125牧場）でした。
- ③ 規模が大きくなるにつれ、「不足している」傾向がみられます。

規模 (馬房数別)	充 足	不 足	非常に不足	不足延べ人数	回答牧場数
1～29	9	7	0	6	16
30～59	32	22	2	43	56
60～89	11	12	2	29	25
90～	12	12	4	65	28
合 計	64	53	8	143	125
%	51.2%	42.4%	6.4%		100.0%

(2) 騎乗技術者レベルの満足度

- ① 「満足」は、全国で77牧場（64.7%）でした。
- ② 規模が大きくなるにつれ、「不満足」・「非常に不満足」が増加しています。

(3) 騎乗者の経験年数

- ① 騎乗者経験年数は、「5年以上」経験者が全国平均で52.8%を占めています。
- ② 規模が大きくなるにつれ、経験年数が少なくなる傾向がみられます。

地区	1年未満	1～5年未満	5年以上	合計	回答牧場数
北海道	43	296	414	753	64
東北	6	32	44	82	9
関東	7	92	99	198	24
関西・北陸	22	80	54	156	15
九州	0	4	40	44	11
全国	78	504	651	1,233	123
%	6.3%	40.9%	52.8%	100.0%	

6. 調教業務

(1) せり馴致

- ① せり馴致を行っている牧場は、全国で65牧場（49.6%）でした。
- ② そのうち、北海道地域では51牧場（78.5%）と多くを占めています。

(2) 騎乗馴致

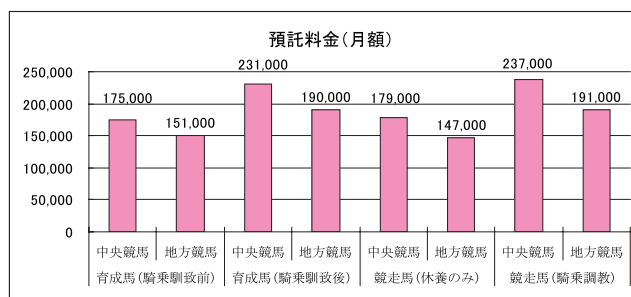
- ① 騎乗馴致を行っている牧場は、全国で107牧場（81.7%）でした。
- ② そのうち、北海道地域では63牧場（58.9%）と多くを占めています。

区分	行っている	馴致内容								行っていない	記入なし
		～10日	～20日	～30日	～40日	～50日	～60日	60日超	不明		
北海道	63	17	27	13		2	2		2	2	1
東北	10		3	5				2		0	2
関東	16	1	7	4	1		3			8	1
関西・北陸	7		1	2			4			5	4
九州	11	1	2	3				3	2	1	0
全国	107	19	40	27	1	2	9	5	4	16	8
構成比 (%)	81.7	(17.8)	(37.4)	(25.2)	(0.9)	(1.9)	(8.4)	(4.7)	(3.7)	84.2	20.0

注1. 「せり馴致の有無」に関する構成比欄は、131牧場に対する割合です。
注2. 「馴致開始から終了までの日数」に関する構成比は、実施牧場107牧場に対する割合です。

7. 預託料金（装蹄料金、治療代等を除く基本料金）

- (1) 「中央競馬向け」馬月額預託料は、育成馬（騎乗馴致前）が175千円、育成馬（騎乗馴致後）231千円でした。また、競走馬については、「休養のみ」が179千円、「騎乗調教」が237千円でした。
- (2) 「地方競馬向け」馬については、「中央競馬向け」馬の約8割強の水準でした。
- (3) 牧場の規模別（馬房数別）にみると、大規模になれば預託料金が高くなる傾向がみられません。



この「育成経営の実態及び改善に関する基礎調査（育成牧場の概況調査）」につきましては、今後も引き続き継続してアンケート調査を実施いたしますので会員の皆様方のご協力をお願い申し上げます。

詳細は、育成協会ホームページをご覧ください。

<http://www.ttda.or.jp>

基礎調査結果について

—競走馬資源有効活用事業—

平成20年度「育成経営の実態及び改善に関する基礎調査事業」のなかで、会員の育成成果を公開する場でもある2歳トレーニングセールについて分析を行いましたので、報告します。

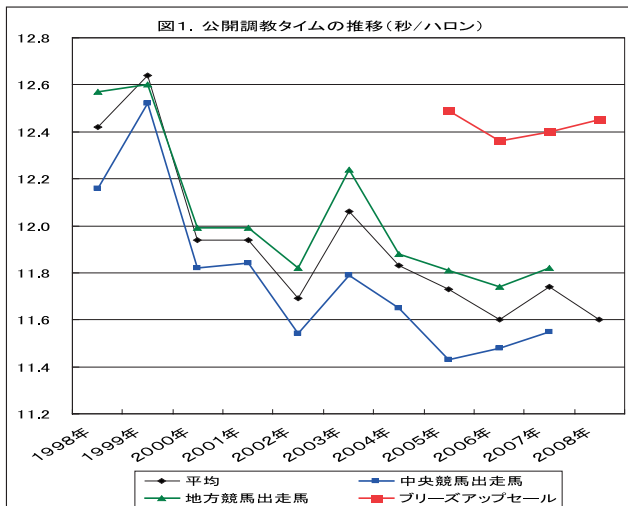
平成20年度は「公開調教タイムを重視するあまり育成馬に無理な調教を行い、後々の競走成績に悪影響があるのではないかと危惧」が一部関係者の問題意識としてあったので、「公開調教タイム」に焦点をあてて分析しました。

集計データは、1998年～2008年の2歳トレーニング市場で公開調教タイムの記録がある上場馬(集計項目により差異があるが最大3,391頭、ほかに参考としてブリーズアップセール上場馬295頭)とした。競走成績等のデータは、2008年9月16日現在の数値です。

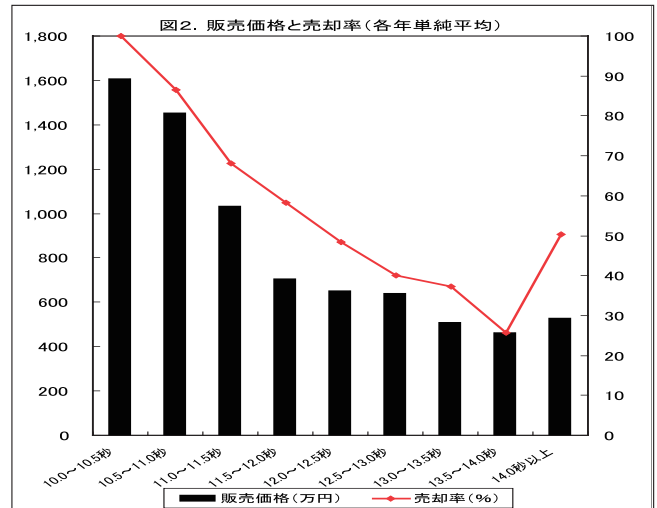
(結果)

1) 公開調教タイムは、年々改善されている(図1: 12.4秒/ハロン→11.60秒/ハロン)。

- ① 取引後、中央競馬で出走した馬の方が、地方競馬で出走した馬に比べセール時の公開調教タイムが良好であった。
- ② ブリーズアップセールは、ゆとりを持った走破タイムである。

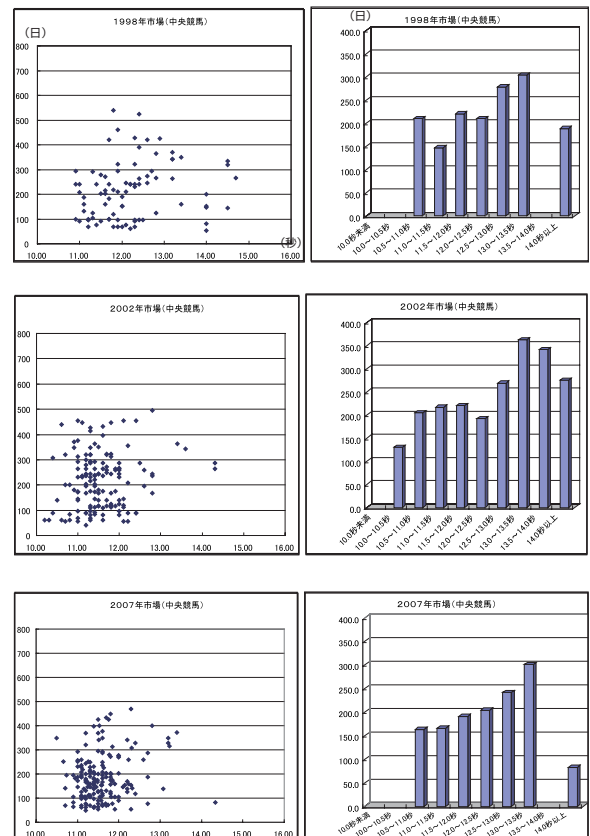


2) 公開調教タイムが良好なほど、販売価格、売却率が良好である(図2)。



3) 公開調教タイムと(市場開催日から)初出走日までの日数をみると、調教タイムが速いほど、初出走までの日数が短い(図3)。

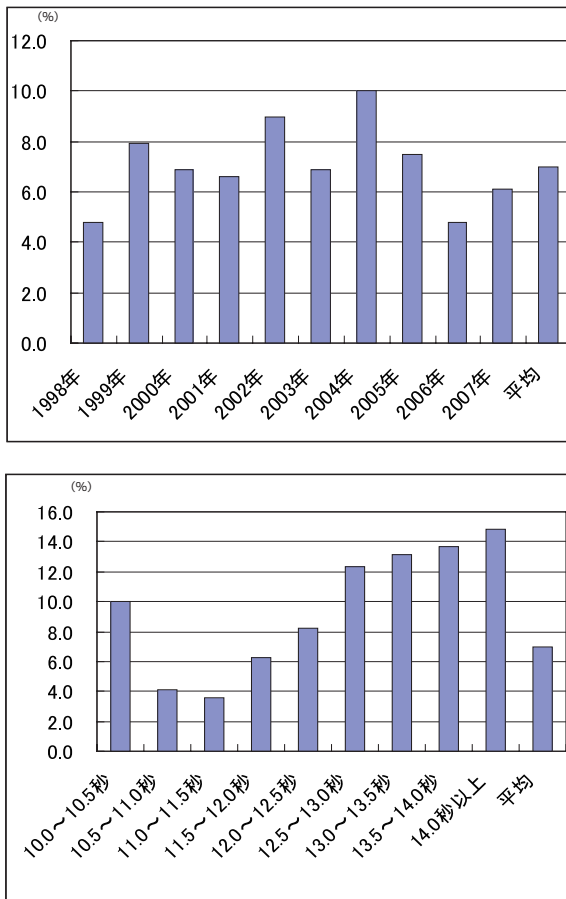
図3. 走破タイムと初出走までの日数



- ① 調教タイムの改善と初出走日数の顕著な改善がみられ、バラツキから次第に集中化している（散布図）。
 - ② 調教タイムが速いほど初出走日数の短縮が図られ、その傾向は次第に明確化している（棒グラフ図）。
- これらから、調教技術の顕著な改善が伺える。

4) 2歳トレーニングセール上場馬で中央競馬・地方競馬の出走記録のない馬（国内で出走しなかった馬）の比率をみると、公開調教タイムが良好なほど、その比率は低い傾向にある（図4）。

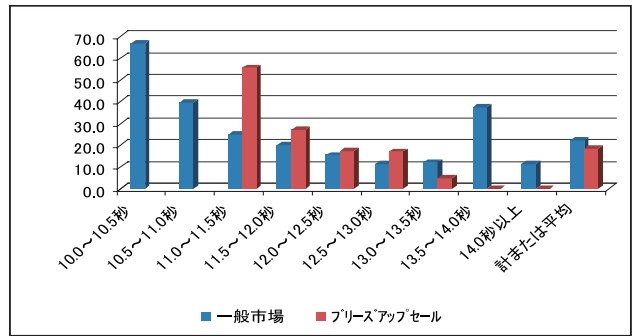
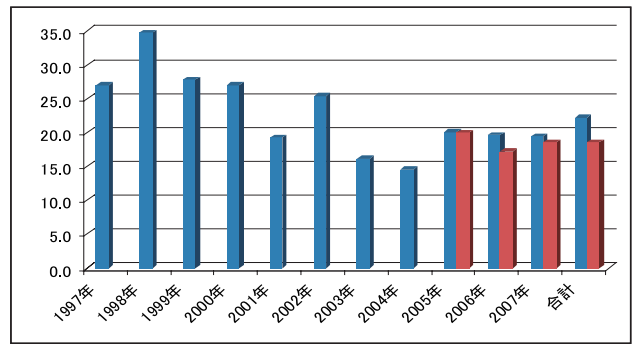
図4. 出走記録のない馬の比率 (%)



注) 「10～10.5秒」：記録頭数10頭、未出走頭数1頭
「10.5秒～11.0秒」：記録頭数131頭、未出走頭数5頭
「11.0秒～11.5秒」：記録頭数749頭、未出走頭数27頭
となり、「10～10.5秒」頭数は、全体記録頭数2,879頭に比較して小数である。

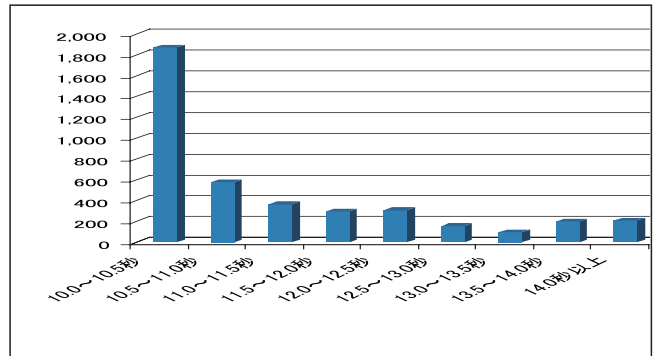
5) 勝ち上がり率（優勝馬率）は、漸減傾向にあり、2007年市場上場馬では19.5%（市場開催～翌年3月まで）であった。走破タイムと勝ち上がり率は、ほぼ相関関係にある（図5）。

図5. 勝ち上がり率（優勝馬率%）



6) 上場馬が翌年3月までに獲得した賞金額は、公開調教タイムが良好なほど大きい（図6）。

図6. 平均獲得賞金額（中央競馬：万円）



	10.0～10.5秒	10.5～11.0秒	11.0～11.5秒	11.5～12.0秒	12.0～12.5秒	12.5～13.0秒	13.0～13.5秒	13.5～14.0秒	14.0秒以上	計
実頭数	9	86	379	388	187	61	33	8	26	117
平均獲得賞金	1,874	580	367	296	310	155	98	199	211	

(結論)

「公開調教タイムを重視するあまり育成馬に無理な調教を行い、後の競走成績に悪影響を及ぼしているのではないか。」との危惧については、極く小数の例外はあったとしても、今回の調査においては、全体的傾向としては認められなかった。

その要因の一つとして、近年の調教技術の向上がその背景にあるものと考えられる。



平成21年度 通常総会開催

平成21年度通常総会は、平成21年2月20日、日本中央競馬会本部ビル7階大会議室において、多数の来賓の出席を得て開催されました。

小沢会長から、「競走馬の才能を開花させる育成者の役割は重要かつ不可欠で今後はその役割の重要性をより認識する必要がある。」との挨拶がありました。次いで、農林水産省漆原勝彦競馬監督課長、日本中央競馬会水野豊香理事からの来賓祝辞をいただきました。

議長に荻野豊氏が選任されて議事に入り、次の議案が審議されました。

-
- 第1号議案 「平成20年度事業報告および収支決算について」
 - 第2号議案 「平成21年度事業計画及び収支予算について」
 - 第3号議案 「平成21年度会費等の額並びに徴収の方法について」
 - 第4号議案 「役員を選任について」
-

役員は理事3名を減員し、互選理事会を経て次の方々が再任されました。

- 会長 小沢一郎 副会長 吉田武徳、荻野豊
常務理事 二階堂純信、
理事 飯田正剛、高橋司、諏訪豊蔵、沖崎誠一郎、
中内田克二、柏木務、赤松勇二
監事 安達正奉、倉澤景春（敬称略）
理事 11名 監事 2名



平成21年度「育成等に関する懇談会」の開催

平成12年度から「育成等に関する懇談会」が開催され、「競走馬育成に関わる諸問題」について日本中央競馬会と当協会との間で意見交換を行ってきました。

本年度の懇談会は、7月3日午後1時30分から、日本中央競馬会水野理事、田辺馬事部長、木口生産育成対策室長ほか担当者が、競走馬育成協会から吉田、荻野副会長以下7理事ほか担当者が出席して、日本中央競馬会六本木事務所9階第2会議室で開催されました。

協議は、「生産育成技術者の確保」、「育成者のウイナズサークルにおける表彰拡大」などについて意見交換がなされ、「生産育成技術者の確保」対策では競馬関係5団体での就業促進策、「ウイナズサークルでの表彰」では新潟2歳ステークス競走での表彰拡大が話し合われました。

その他、トレセンへの入厩検疫、育成牧場の基盤強化策についても言及がありました。当協会からの要望は別紙のとおりです。

また、要望に先立って中央競馬施行に果たしている役割について簡単な説明を行いました。

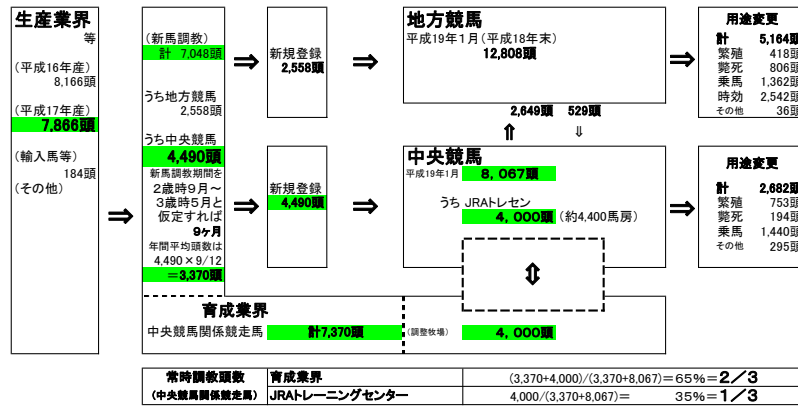
- ① 中央競馬の競走馬調教頭数の少なくとも2/3以上は育成業界が担っており、JRAトレーニングセンター内での調教頭数は1/3以下であること（図1）
- ② 育成牧場での育成調教のトレーニング目標は年々高度化が進み、最近では「追い切り調教」仕上げ段階まで行っている牧場が約半数に上ること（図2）
- ③ 育成調教の充実の例として、かつて出走馬確保に苦勞した2歳馬競走は競走回数420→540競走、1競走当たり出走頭数も11頭台→13頭台

へと充実していること（図3）

- ④ 2・3歳競走の優勝馬についてみると、調教日数の70～80%以上は育成牧場の調教であること（図4）
等について資料に基づいて説明しました。

次いで別紙のとおり、育成業界での従業員確保の重要性、育成目標の高度化に伴う設備投資の必要性、育成情報の提供を要望し、育成経営の健全性の確保が競走馬育成業界にとっても競馬施行面においても重要なことを説明いたしました。

図1. 平成19年度におけるサラ系競走馬の動き



資料：農林水産省畜産振興課「馬関係資料」、地方競馬全国協会「登録馬主及び登録馬に関する統計資料」、日本軽種馬登録協会・日本軽種馬協会「軽種馬統計」

図2. 育成調教のトレーニング目標 (全国)

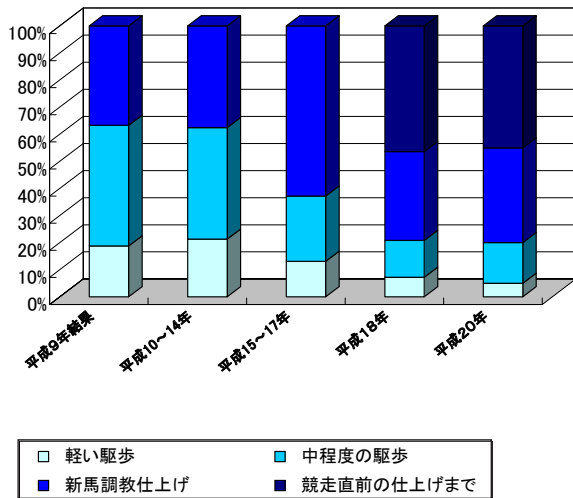


図3. 競走回数と平均出走頭数

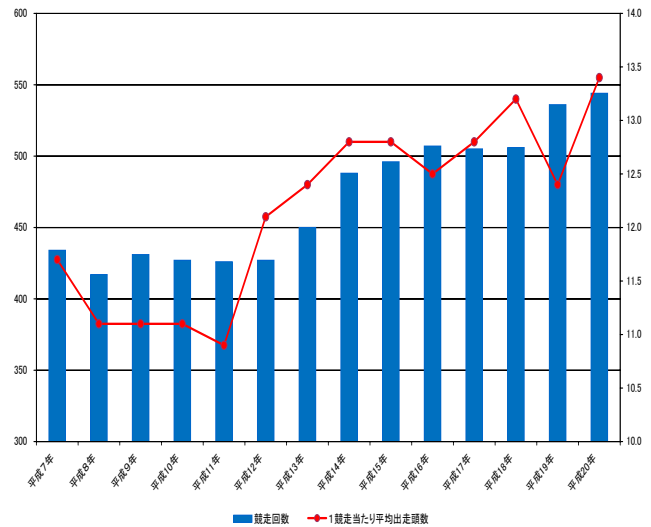
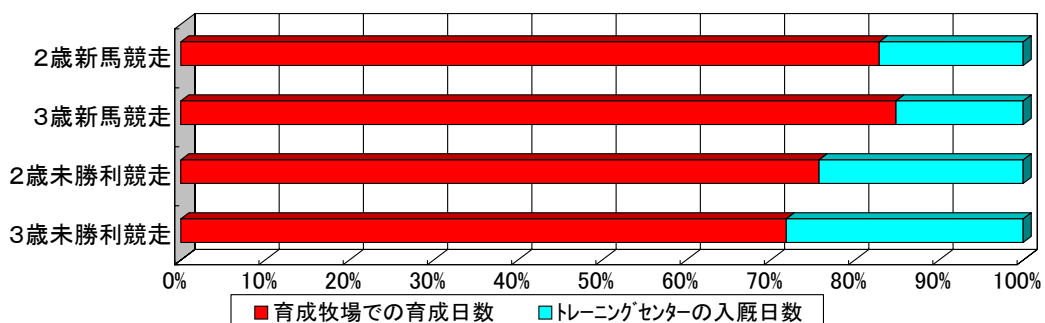


図4. 後期育成開始～優勝までの日数の内訳 (%)



(別紙)

平成21年度「育成等に関する懇談会」について

平成21年7月3日
社団法人 競走馬育成協会

1. 育成技術者の確保

日本の育成は、育成・調教施設の高度化、分業化、協業化が進み、育成技術は飛躍的な進展を遂げている。

一方、これらの育成に携わる育成技術者をはじめとする人材の慢性的な不足と相俟って若者の競馬サークル（軽種馬の生産・育成牧場）へ就労希望者が激減しており、人材確保は育成業界の懸案事項となっている。このような状況が進捗すると育成の経営基盤の弱体化と技術低下を招き、ひいては人材不足によりやむなく廃業せざるを得ない事態が生ずると競馬の安定的な発展に支障をきたすので当協会も強い危機感を感じている。今のうちに競馬サークル全体で対策を講じる必要がある。

このたびの軽種馬関係5団体の連携で発足した「牧場就業促進事務局」による「競走馬の生産育成牧場への若手就業者参入促進プラン」に賛同する。今後も詳細については協議の上、実現に向けてJRAの協力をお願いしたい。

2. 育成技術表彰の維持と充実

育成技術表彰事業は育成牧場の役割と育成技術水準の向上に資する事業として、会員の期待や関心のきわめて高い事業である。育成技術の向上やトレセンへの預託環境の変化等に伴い、今後表彰対象件数が増加することが予想される。

また、昨年はJRAのご好意により競馬場

における2歳ステークス競走における育成者表彰が実現した。今後も対象競走の拡充とともに、これまでと、同様の事業が維持と充実がされるよう特段の配慮をお願いしたい。

3. 育成牧場の基盤強化対策

トレセンと育成牧場の連携が急速に発展し、よりレベルの高い技術が求められている。

これに伴う育成・調教を行う施設・機械の整備は不可欠なものとなっている。

競馬の安定的な発展のためには会員の施設の改善が急務な事から、より有効な事業の設置について検討を願いたい。

4. 競馬ファンへ育成情報の提供

育成の重要性は競馬関係者へ徐々に浸透してきている。特に、民間育成牧場の役割は調教師に匹敵するところまで近づいてきている。このような実態から、競馬ファンへ育成情報を積極的に提供する時期が到来していると考えられる。競馬ファンに対して育成情報の提供を行うとすれば、育成者・育成場所・育成期間を明確にするための情報整備が必要である。当面は育成馬の移動履歴を把握し、いつでも開示できる体制を構築しておくことが最善と思われる。具体的な方策の一例として、健康手帳へのより詳細な移動歴の記入を徹底し、さらに義務化（記載していない馬は入厩できない）しておくことが必要であると考える。これは防疫対策上も重要であると考えられる。

育成技術表彰事業について

1. 育成技術表彰事業について

- (1)平成11年11月29日制定「育成技術表彰規程」により、平成12年度から現在の表彰事業が開始されました。
 (2)平成13年度には、育成段階の成果が反映され易いと考えられる新馬競走が表彰対象に加わり、重賞競走とともに表彰が行われてきました。また、次第に表彰対象の拡充・充実が行われてきました(表1)。

2. 平成20年度の表彰事業について

- (1)平成20年度の表彰件数は、会員の育成技術向上の成果として、表彰対象競走461件の半数に近い218件と年々増加し、予算額を上回る事態となり、単価切り下げを余儀なくされている状況にあります。
 (2)平成20年度の表彰対象者は、表3のとおりです。

3. 平成21年度の実施について

- (1)現在の制度になってからちょうど10年目を迎える平成21年度については、昨年度とほぼ同様の形で実施されること、本年2月の通常総会で決定されています(表2)。
 (2)なお、本年度から表彰馬は、ホームページ <http://www.ttda.or.jp> に毎週更新・掲載しておりますので、本事業の概要とともに、詳細をご覧ください。

表1. 育成技術表彰事業の推移

「育成技術表彰規程」制定(H11.11.29)

区分	表彰対象及び拡充の経緯	(表彰件数)
平成12年度	2歳重賞・3歳重賞 障害重賞・3歳(4歳)以上重賞競走の3歳馬・ダート重賞交流競走(3・4歳限定)	39件
平成13年度	2歳新馬競走	147件
平成14年度		163件
平成15年度	特定の重賞競走、表彰要件の緩和(育成期間5ヶ月以上)	125件
平成16年度	3歳新馬競走	195件
平成17年度		185件
平成18年度	3歳オープン競走	201件
平成19年度		203件
平成20年度		218件

表2. 平成21年度の実施について

種目	表彰要件	賞金	備考
新馬競走	2歳新馬競走	原則として10万円	ただし、賞金総額が予算額を上回った場合、単価切り下げを実施。
	3歳新馬競走		
2歳重賞競走 グレードIの優勝馬 グレードII及びIIIの優勝馬	継続して150日以上育成し、優勝した馬を育成した会員	原則として20万円 原則として10万円	
障害重賞競走 グレードIの優勝馬 グレードII及びIIIの優勝馬	継続して60日以上障害調教を行った馬であって、トレセン等入きゅう後6週間以内に障害試験に合格し、優勝した馬を育成した会員	原則として20万円 原則として10万円	
3歳以上の重賞競走	トレセン等入きゅう直前に、継続して14日以上育成調教を行った馬であって、トレセン入きゅう後30日以内に優勝した馬を育成した会員	原則として20万円	
平地の3歳以上のオープン競走 (3歳限定競走を除く。)		原則として10万円	

注1. 前年度の12月31日現在、当協会の会員であること。

注2. ただし、障害重賞競走にあつては、障害調教開始日現在において、当協会の会員であること。

表3. 平成20年度表彰対象者一覧

表彰会員名	代表者名	支部名	受賞件数				
			新馬競走	重賞競走			オープン
				GⅠ・jpnⅠ	GⅡ・jpnⅡ	GⅢ・jpnⅢ	
ノーザンファーム	吉田 勝己	北海道	44	1	1	5	
社台ファーム	吉田 照哉	北海道	37			1	
(有)吉澤ステーブル	吉澤 克己	北海道	17				
(有)ノースヒルズマネジメント	前田 幸治	北海道	7				
(有)ヤマダステーブル	山田 秀人	北海道	7				1
田口トレーニングファーム	田口 廣	北海道	5				
(有)下河辺牧場	下河辺 俊行	北海道	5				
(有)武田ステーブル	武田 茂男	北海道	5				
(有)ビッグレッドファーム	岡田 美佐子	北海道	4				
(有)坂東牧場	坂東 勝彦	北海道	4				
(有)高昭牧場	上山 泰憲	北海道	4				
(有)カタオカステーブル	片岡 禹雄	北海道	4		1		
(有)加藤ステーブル	加藤 信之	北海道	3				
(有)千代田牧場	飯田 正剛	北海道	3				
(有)メジロ牧場	北野 雄二	北海道	3				
(有)日進牧場	谷川 利昭	北海道	3				
(有)エクセルマネジメント	山本 敏晴	北海道	2				
(有)グランデファーム	衣斐 浩	北海道	2				
(有)目名共同トレーニングセンター	岡田 隆寛	北海道	2				
(有)ケイアイファーム	中村 祐子	北海道	2				
(有)宇治田原優駿ステーブル	八木 秀之	関 西	2	1		1	2
(有)ファンタストクラブ	古岡 宏仁	北海道	2				
(有)西山牧場	西山 茂行	北海道	1				
(有)フロンティアスタッド	清川 孝徳	北海道	1				
(有)谷川牧場	谷川 忠子	北海道	1				
(有)太盛トレーニングセンター	齋藤 實	北海道	1				
(有)荻伏共同育成場	村下 正俊	北海道	1				
MS遠野	竹之下 満義	東 北	1				
ハントバレートレーニングファーム	吉田 久則	北海道	1				
(有)ベーシカル・コーチング・スクール	高橋 司	北海道	1				
(有)コスモビューファーム	岡田 繁幸	北海道	1				
(有)ランド牧場	伊藤 佳幸	北海道	1				
(有)内田ステーブル	内田 裕也	北海道	1				
本桐共同育成センター	長井 伍郎	北海道	1				
(有)チェスナットファーム	広瀬 亨	北海道	1				
(有)浦河中央育成場	土肥 俊彦	北海道	1				
(有)ミッドウェイファーム	宮崎 利男	関 東	1				
畠山牧場豊畑トレーニングセンター	畠山 重博	北海道	1				
(有)サラブレッドトレーニングアイランド	中村 浩章	関 東	1				
武牧場	武 栄子	北海道	1				
(有)ビクトリーホースランチ	荻野 豊	北海道	1				
(有)下河辺トレーニングセンター	下河辺 行信	関 東	1				
(有)天栄ホースパーク	半澤 信彌	東 北	1				
(有)三石軽種馬共同育成センター	前川 則久	北海道	1				
(株)グリーンウッドパーク	木村 幸雄	関 西		1	5	6	
(株)アカデミー	田中 良三	関 西				1	
テンコー・トレーニングセンター	島川 利子	東 北				1	
(有)ミホ分場	藤沢 美咲	関 東				1	
計	48会員		189	2	3	12	12

競馬関連機材等有効活用事業

競馬関連機材等有効活用事業は、会員の育成施設用機材の投資負担を軽減し、経営の安定に資する目的で、当協会が関係各位に働きかけ、JRA関連施設等で使用を取りやめた競馬関連機材等について再利用を斡旋するもので、平成15年より実施されています。

平成21年度は福島競馬場で使用されていた馬場柵を9月に斡旋しました。

なお、応募が重複した物件に関しては、監事立会いの下、厳正なる抽選により取得者を決定しています。

取得者の選定について、前回の同種物件の応募時に抽選に外れた取得希望会員につきましては、一回に限り優先倍率の適用を行いますので、前回同種物件で外れた会員の方はふるってご参加ください。

また、前年度の取得が完了していない会員については応募されても除外となりますのでご注意ください。

個々の提供物件により、買取額や取得に係る手数料、輸送費等の経費は、取得会員の自己負担となりますが、今後も優良機材を多数斡旋できるよう、情報収集に努めてまいります。



【JRA 福島競馬場より提供のあった馬場柵】



【抽選は監事立会いの下、公正に行なわれました。】

お知らせ

50周年記念事業

当協会は、昭和34年11月7日に農林大臣より設立を許可され、平成21年に創立50周年を迎えます。平成20年第5回理事会において下記のことが承認されました。

記

1. 記念式典について
平成22年の通常総会時に行います。
2. 記念誌の発刊
「社団法人 競走馬育成協会 50周年史（仮題）」を22年6月頃に発刊予定
作成に当たっては、常務理事を委員長とし、各支部理事1名、学識経験者理事による編集委員会を設置する。
※会員の皆様も写真等の資料があれば協会までお知らせ下さい
3. 創立50周年式典行事に伴う功績者・永年勤続者表彰基準の制定

功績者・永年勤続者表彰基準

（趣 旨）

1. 社団法人 競走馬育成協会（以下「協会」という。）の創立50周年記念行事の一環として、記念式典において功績者及び永年勤続者の表彰を行う。

（表彰の方法）

2. この表彰は、協会会長の表彰状を以って行う。

（表彰対象者）

3. この表彰を受ける者は、次の各号に該当する者とし、次の区分により選考する。

（1）功績者

協会役員として20年間以上または30年以上在籍した者及び次に掲げる者であって、協会会長が功績のあった者として認めた者とする。

なお、この表彰は、20年以上の表彰を受けた者に対する30年間以上表彰の授与を妨げない。

- ① 表彰を行う年度において、その年度内までに20年間または30年間に達する者
- ② 前回表彰時以降に退任した役員で20年間以上または30年間以上の年数を満たした者

（2）永年勤続者

協会職員・嘱託（及び支部事務局員）として20年以上勤務し、協会事業遂行上功績があると認められる者。その他会長が特に必要と認める者。

但し、20～40周年記念行事において表彰した者を除く。

ホームページ告知

さる6月25日に、当協会のホームページを開設いたしました。
アドレスは

<http://www.ttda.or.jp>

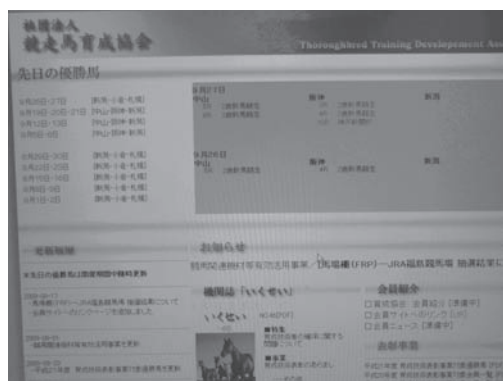
競走馬育成協会でご検索してください。
現在、内容を順次増補構築中です。

主なコンテンツ

1. 会員の皆様が育成した優勝馬を紹介、毎週更新しています。
2. 競走馬育成協会の事業、行事、お知らせ、ニュース等を紹介いたします。

(お願い)

1. ホームページ・ブログを開設して会員の皆様のホームページ・ブログを「会員ホームページ紹介」欄でご紹介したいと考えています。ご承諾できる会員の方は、ご一報ください。
2. 相互リンクもお願い申し上げます。



いくせい

2009 47号

発行日 平成21年11月19日
発行 社団法人 競走馬育成協会
〒105-0003 東京都港区西新橋1-1-19
日本中央競馬会本部ビル5階
TEL. 03(3501)4771(代) FAX. 03(3501)4772
E-mail kgj00522@nifty.ne.jp
編集責任者 吉田武徳
制作・印刷 西谷印刷株式会社

